

38

16世紀前半の解剖用語について

—脱アラビアの試み—

澤井 直

順天堂大学医学部解剖学第一講座

本発表では16世紀前半の解剖用語について検討する。特に『モンディーノ解剖学』において用いられた解剖用語の消長が問題となる。

14世紀初めに成立した『モンディーノ解剖学』が16世紀半ばにいたるまで中心的な解剖学書であったことはよく知られている。ポーロニャ大学で活躍したモンディーノはアラビアの医学書の色濃い影響を受けながら、古代ギリシアからの解剖学の知見をラテン語で伝えている。

この『モンディーノ解剖学』はラテン語で書かれているとはいえ、後のヴェサリウスの頃とは異なる用語が用いられている。Singerなどは『モンディーノ解剖学』ではアラビア語の音をラテン語に転写した用語が多く、一方でヴェサリウスではラテン語が本来持っていた語彙やギリシア語の音を転写した用語を用いていると指摘している。

このようなアラビア語の影響の強い用語から脱却を試みた最初期の人物として、Ferrariはアレッサンドロ・ベネデッティを挙げている。ベネデッティが1502年に発表した『人体誌すなわち解剖』では冒頭に各章の目次がある。その目次の後に、参照した作家の名称の一覧がおかれているが、ここにはギリシアとローマの作家の名前だけがあり、アラビアの作家の名前はない。そして本文においてもアラビア語由来の用語が排除されている。

ベネデッティによるアラビア語由来の語彙からの転換の試みがヴェサリウスにおける用語の選択に影響を及ぼしたことは間違いないであろう。またヴェサリウスを教えたシルヴィウスの用語もベネデッティと共通するものが多く、ヴェサリウス以降に現れた解剖学書においても同様の傾向がある。

解剖学全般に対してのヴェサリウスの圧倒的な影響、あるいは解剖用語についてのシルヴィウスの影響を考慮すれば、16世紀半ば以降の解剖用語にアラビア由来の語が見いだせなくなるのは当然の成り行きと思われる。しかし、ヴェサリウス以前、シルヴィウス以前においてはどうだったのだろうか。

この問いに答えるために16世紀前半に出版された『モンディーノ解剖学』と密接な関係のある解剖学書において、特に腹部の構造の名称について調査した。

アキリーニの『解剖学注解』（1520）は『モンディーノ解剖学』の内容に関して、ガレノスやアヴィケンナなどの見解を引き合いにして注釈を加えている。そこで使われる用語は『モンディーノ解剖学』と同じである。

ベレンガリオ・ダ・カルピの『人体解剖の明晰かつ豊かな梗概』（1523）では『モンディーノ解剖学』の内容を図と対応させながら紹介している。各章の冒頭に章題があるが、その章題は当時出版されていた『モンディーノ解剖学』と対応している。その章題に『モンディーノ解剖学』とは異なる単語が使われている。例えば「De peritoneo seu siphac」では「siphac」が『モンディーノ解剖学』で用いられるアラビア語由来の語で、「peritoneo」がベネデッティの用いたものになっている。他にも同様の例が複数見られる。このようにベレンガリオは『モンディーノ解剖学』の内容およびその用語を尊重しつつも用語は新たなものも取り入れている。

ベレンガリオと同様にマッサ『解剖学入門』（1536）においてもやはり『モンディーノ解剖学』の用語とベネデッティの用語の両方が用いられている。

以上のようにヴェサリウス以前においては、完全に排除はされていないながらもアラビア語由来の解剖用語からの脱却が図られていることが窺われる。

* 本報告は日本学術振興会科学研究費平成十九年度若手研究(B)「語彙の変遷から読み取る解剖学の分野形成」の一部である。